



山登如

# 2020年度 付中通信第18号

## 文化づくり

2021.2.26 (金)

高水高等学校附属中学校長 宮本 剛

「学校文化」という言葉が好きです。そんな言葉を学校でも社会でも使う人はあまりいません。私もいつこの言葉に出合ったのか、もうわからなくなっていますが、たぶん、文化祭を楽学祭にアップデートしようと悪戦苦闘していた時代だったような気がします。

付中通信第11号はタイトルを『学校文化』として、運動会や文化祭にまつわる思い出やそれらの行事への思い入れを書きました。しかし、文化という言葉はなかなか奥の深い言葉です。文化と聞いて、人によって浮かんでくるイメージはそれぞれ違うと思いますが、私にはまず、社会の中で育まれてきた風習や習俗そして生きるための知恵、さらにその土地土地の風土を背景に人々の営みが織りなす作法や儀礼、それら全体を髣髴(ほうふつ)させます。

そういう語彙(ごい)の解釈からすれば、「学校文化」というような、文化という言葉の限定的な使い方は、そもそも間違っているのかもしれませんが。と言いながら11号で私は「運動会文化」という言葉を躊躇(ちゅうちょ)なく使っています。文化という言葉をそこでは、特徴や特色をアピールする目的で使っていました。つまり、こんなに生徒が熱中し盛り上がる運動会なんだぞと、そういう意図を醸(かも)し出そうとして使っています。



「学校文化」という言葉を持ち出すときも、もそれと同じ気持ちで動いています。この学校は他校とは違う文化があるのだ、すなわちこんな特徴と特色がある魅力的な学校なんだと、言いたい訳です。

しかし実は、「学校文化」にはもう一通りのニュアンスがあります。学校の内と外では少

し世界観が違って、特別な人間関係が成り立つ空間だというニュアンスです。

たとえば、制服があるのもその世界観の現れだと私は考えています。同じ衣服を身にまとうことで、個性が埋没するという見方も否定はしませんが、私はむしろ出自とか身分（もう古いか）とか親の素性とか、その生徒の背後にあって平等に見えなくする関係性や公平に扱にくくする要素を隠してくれる、忘れさせてくれる手段の一つだと思うのです。だから、生徒たちがプライドを持って制服を着こなしているような学校は、対等な人間関係を築くことができている学校だと思います。

そして、この対等な人間関係こそ、学校においては最も崇高な、守り通さなければならないものです。つまり、学校文化とは学校のそういった条件の下で育まれた特別な文化だと考えるからです。個性はそのまま認められ、能力はさまざまな場面を設けて高められ、認められ、ほめられる、また逆にならぬことはならぬと叱られる、そういう空間が学校であり、そこで育まれた時間と関係性をそのまま文化と私は呼んでみたいのです。

楽学祭は、クラスやグループ単位での不可能を可能にさせる協働の体験を軸に培われてきました。でも、この楽学祭では収まりきらなかった、もう一つの軸があります。それは学校の基本的機能である学習活動の発表です。中六合同発表会は、探究という学習方法に沿って、学習を進め、その成果を中1から高2までの5学年が一堂に会し、共有していこうという会です。

まさに本校の学校文化の面目を高めるための会という言い方ができると思っています。

